海外レポート

ワシントン大学研修報告

－米国で感じた「日本」－

かわもとまりこ
川本真梨子
（メディアセンター本部）

1　はじめに

2017年５月から11月にかけての半年間，米国ワシントン州シアトルにある州立大学，ワシントン大学（以下「UW」とする）で研修する機会をいただいた。本研修はワシントン大学東アジア図書館（以下「EAL」とする）が募集するTateuchi Visiting Librarian Program[1)]に応募し，実現したものである。このプログラムはTateuchi Foundation[2)]の資金援助を受けており，EALの日本語資料の整理等に，日本での経験を活かし貢献することが求められている。筆者はプログラムで２人目，本学からも２人目のTateuchi Visiting Japanese Librarianとして渡米した。プログラム参加者には，前年と同様に毎月の報告書提出と日本の図書館事情の紹介プレゼンテーションが義務付けられている。滞在中は，ワシントン大学図書館（以下「UW Libraries」とする）における業務の体験や，各種会議やイベントへの参加，米国で開催される国際カンファレンスへの参加などを通じて，米国での最新の図書館事情に触れる機会が与えられる。また新たな取り組みとして，米国の図書館事情や実際にEALでの業務で経験したこと，シアトルでの生活の様子をSNSで発信した。さらにこのプログラムでは，個人の研究活動も認められている。米国の大学図書館における日本研究支援の現状や，日本語コレクションの構築状況について知見を得るため，米国内で東アジア地域のコレクションを収集する大学図書館を訪問し，日本研究や東アジア研究を支援する図書館員の方々にインタビューを行った。

2　タコマ日本人会のコレクション整理

今回のTateuchi Visiting Librarian Programでは，UW Librariesのスペシャルコレクション部門が管理する，タコマ日本人会及びタコマ國語学校[3)]に関連するコレクション[4)]の整理を行った。

(1) コレクションの概要

UWは，従来日本人移民や日系人研究に取り組んでいる大学である。その中でも，シアトルの約40㎞南に位置するタコマキャンパスは，1942年に閉校したタコマ國語学校（兼タコマ日本人会）の跡地でもある。（図１）[5)] UW Librariesでは，現地に残されたタコマ國語学校やタコマ日本人会に関する資料の寄贈を受け，その整理を進めている。

図１　タコマキャンパス内　日本語学校記念碑

寄贈された資料は全体で段ボール約100箱に相当し，図書や新聞といった出版物から書簡などのアーカイブ資料まで，多種多様な資料が混在していた。その多くは現在も未整理の状態で，タコマにあるワシントン州歴史研究センター（The Washington State History Research Center）[6)]にて保管されている。今回プロジェクトで整理したコレクションは，このうちのタコマ日本人会を中心としたアーカイブ資料に該当する。既に資料保存のためのクリーニングは済んでおり，ある程度の資料のまとまりごとに，見出しをつけたフォルダにファイリングされ，BOXに収容されている状態であった。分量としては段ボール23箱686フォルダ，内訳としては①タコマ日

本人会関係資料（17箱）② タコマ國語学校関連資料（３箱）③ その他（３箱）に大別され，そのほとんどが日本語である。（図２）

図２　整理前のコレクション

タコマ日本人会は1891年に発足し，1908年にワシントン州の認可を得て正式に設立された組織である。この時代に興隆した日本人街を管理し，他地域の日本人コミュニティや米国コミュニティと移民をつなぐ役割を担っていた。現在もタコマには日本人会が存在するが，太平洋戦争中の日系人強制収容により，一時タコマから日本人の姿が消えてしまった。今回整理した資料は1904年から1942年までのもので，タコマで日本人街が興隆し，そこで発展したコミュニティが消滅するまでの記録を含むものである。

(2) 作業内容

コレクション整理の具体的な作業内容を紹介する。整理に着手する前に，予め作業方針をUW Librariesスペシャルコレクション部門のPacific Northwest curatorであるAnne Jenner氏と，本研修のコーディネーターであり日本研究司書の田中あずさ氏と相談した。筆者に課せられた作業は，① フォルダ内の資料を１点ずつ確認し，その詳細（Description）を記録することと ② 現在のBOXの分類とファイリングついて，より適した方法がないか再検討の上整理し直すことの２点だった。

資料は，概要を表すフォルダ名とその年代が記されたフォルダに入れられた上でBOXに収納されている。それらのBOXは，BusinessやDonationなど，何に関係する資料かにより，分野ごとにまとめて保管されていた。コレクションの情報はExcel表で管理されていたため，この表に対し，より具体的な情報（資料が作成された日付，関連する人物と団体名，書かれている内容，その資料が作成された背景と目的等）を追記した。

(3) 利用者像を想定したコレクション整理

コレクションとして保管されるアーカイブ資料群は，その資料の特性や，管理する機関により扱い方や整理方法が異なる。筆者は，これまでにこのようなコレクション整理の経験がなかったため，事前に本学のスペシャルコレクション担当のもとで整理方法やアーカイブ資料の取扱いを学んだ上で，プロジェクトに臨んだ。

本コレクションについては，特にUW側で定めた整理のためのガイドラインはなかった。そのため，Anne氏や田中氏と相談を重ねる中で，① この資料を必要とするのは誰か ② どのような使い方をし得るのかという観点から整理することとした。

① については，まずは学内外の日系人関係の研究者たちが挙げられる。先にも述べたように，UW内においても日系人研究は行われており，それに携わる教員や学生の利用が考えられる。また，研究者以外には，タコマの日系人コミュニティや，かつてタコマ在住していた者とその遺族が挙げられる。UWが位置するシアトルやタコマは，もともと移民の多い街であり，日本人も例外ではない。近年は日本人移民の子孫がそのルーツを知るため，また自身の遺族に関連する情報を求めて問い合わせてくる例もあるそうだ。そのため，② については，単なる研究対象としてだけでなく，自身や遺族に所縁のある資料としても利用されることが想定された。

上記の利用者像を踏まえ，５月から開始した６ヶ月の作業期間のうち，初めの１ヶ月はコレクションの背景や整理の予備知識を得るため，タコマやワシントン州の日本人移民や日系人に関連する図書を数点読み，関連施設を訪れるなどして，理解を深めた。また，実際作業に着手した６月以降も，学内の研究者（教員）やタコマの地を訪ね，日系人研究や日本人コミュニィの歴史保護に携わる方々から話を伺い，都度コレクションをまとめる観点を検討した。

(4) 整理で苦労したこと

整理の進め方や資料の詳細（Description）の記述をどのように進めるか悩んだ点もあった。ここでは，そのうちの２点を紹介する。

a　資料再分類の基準

資料は寄贈前より長年放置されていたものであり，散逸してしまったものもあれば，非常に悪

い状態で残されているものも含まれていた。さらに筆者の手元に来た時点で，既に他の人の手により，一度整理が行われた状態であった。そのため，寄贈時にどのような状態で資料が存在していたかがわからず，資料同士の関係性が不明瞭であった。中身を見ていくと，異なるフォルダやBOXから関連性の高い資料が見つかることもあった。整理を進める上では，まず資料同士の関連性を探るべく，一度すべてのフォルダ内の資料を確認し，関連の高い資料をまとめてファイリングし直した上で，Descriptionの記述に着手した。

b　固有名詞のDescription

本コレクションはそのほとんどが日本語の資料であり，事務手続きのための資料（渡航証明申請書，出生，死亡等の各種届）や名簿，書簡も多く含んでいた。これらの資料については，なるべく個人名や団体名を記録することとした。しかし日本語でしか記述がないため，個人名についてはヨミを推測するしかなかった。ゆえに，本来であれば英語で記録すべきDescriptionに，別途日本語のScope and Notes欄を設け，現物の表記そのままを記録した。なお，日本語をローマ字表記する際は，ALA-LC Romanization Table[7]を採用した。

(5) プロジェクトのまとめ

本プロジェクトの過程では，Anne氏と田中氏のほかにも，UW Tacoma Libraryの司書や教員，タコマの地域コミュニティの方といった多くの方々の協力を得た。筆者の帰国直前に，タコマ國語学校のオーラルヒストリー研究[8]に携わる教員２名が実際にコレクションの閲覧のために，EALを訪れた。そして國語学校に在籍していた生徒の文集，答案用紙，習字作品などについて１点ずつ確認したところ，オーラルヒストリーのインタビュー中に登場した人物の成果物が含まれていることを発見して，とても驚かれていたのが印象的であった。このようなアーカイブ資料が可視化されることは，研究の第１歩に過ぎないことを実感したプロジェクトであった。今後，本コレクションが活用され，次の研究や発見に繋がることを期待したい。

3　UW Librariesでの取り組み

プロジェクト以外にも，UW Librariesでは様々な図書館業務を経験させていただいた。ここではほんの一部ではあるが，２点の業務経験を紹介する。

(1) 目録業務

筆者は目録担当であるため，現地での目録業務に強い関心を持っていた。前参加者よりすでにUW Libraries及びEALでの目録業務の概要について報告があった[9]が，特にEALで取り組んでいるResource Description and Access（以下RDA）に基づく日本語資料の目録作成の経験を得たいと考え，EALでの目録業務の見学と，古典籍資料の目録作成を行った。

慶應義塾大学図書館では，2017年４月より外国語資料（中国語，朝鮮・韓国語，ロシア語を除く）に限定し，RDAの適用を開始した。RDAに基づく目録作成の肝は“Cataloger's Judgement”である。利用者の検索行動を踏まえ，より柔軟な目録作成を可能としたRDAは，本則のほか別法や任意規定なども含め，カタロガーの判断に基づいた記述ができるよう設計されている。しかし，実際に本学での適用を開始するにあたり，RDAを運用レベルで検討してみると，本則以外の採用をどうするか，RDAに言及がない部分（“Cataloger's Judgement”が求められる部分）について，運用レベルで学内ルールを定めるべきと考えられる点はどこかなど，判断に困ることが多々あった。そのような悩ましい点について，UW Librariesではどのように規定や運用を定めているのかを調査した。

まず，RDAにある別法や任意規定の採用については，LC-PCC PSs（Library of Congress-Program for Cooperative Cataloging Policy Statements：米国議会図書館の目録ポリシー）を採用していた。これはUW Librariesに限らず，LCの目録レコードを元にコピーカタロギングを行う米国の図書館で広く採用しているポリシーである。RDA上で選択できる項目の採用規定のほか，言及のない部分についても，一部独自の規定を定めている。

LC-PCC PSsにも言及がない点について，UW Librariesでは“Cataloger's Judgement”を行っている。しかし，それでも判断に迷う場合は，月に２回開催されるRDA／NACO／SACO Q&A／Reviewという会に持ち寄り，相談することができる。この会はUW LibrariesのPrincipal Catalogerが主催しており，学内各図書館の目録作成担当者が目録作成に関する疑問をその場でPrincipal Catalogerに質問する

ことができる。相談事項がなくても，誰でも任意で参加でき，筆者も研修期間中に７回ほど会に出席した。出席した会では，おおよそ４～７名程度の参加があり，途中参加や退出も可能で，終始和やかな雰囲気で行われた。会は質問がなくなると終了となるが，長い日は３時間にも及ぶことがあった。質問内容は様々で，参加者にはEALなど英語以外の言語を扱う図書館の担当者や，Music LibraryやLaw Libraryなど，楽譜や法令・判例集といった特殊資料を扱う図書館の担当者が多かった。“Cataloger's Judgement”ができるとはいえ，他に事例のない目録の作成は，悩むものである。その点は日本も米国も変わらない。そのような場合に悩みや疑問を共有し，同時に常に最新の目録動向を学べる場であるこの会に参加できたことは，大変有意義な時間であった。

(2) ダイバーシティ

今回の研修では，田中あずさ氏にUW Librariesが主催するイベントや，彼女がメンバーとなっている会議や委員会を紹介いただき，一緒に出席させていただいた。UW Librariesには数多くの会議体があり，彼女は日本研究司書として非常に幅広い活動に携わっていた。出席した会議体の中でも興味深かったのは，Diversity Advisory Committee（図書館職員とコミュニティのダイバーシティに関するニーズを調査し，職員間で図書館のダイバーシティについて議論を進める委員会）とTeaching Learning International Student Group（UW Libraries Instruction & Information Literacy Working Groupのサブグループで，特に留学生への利用指導と情報リテラシーの向上を目指し，ニーズの調査や留学生向けのインストラクションやイベントを企画するグループ）である。

UWはその土地柄，留学生や移民の学生など，様々な文化的背景をもつ者が集まる大学である。また，ハンディキャップ，セクシュアリティ，宗教の違いに対してもオープンであり，図書館においてもこれらの多様性を踏まえたサービスの向上に取り組んでいる。実際にUWやUW Librariesで取り組んでいる活動を目にし，感じたことは，サービスを行う側も「多様性」が必要であるということである。両会議に一緒に参加した田中氏は，一図書館員としての立場と同時に，日本人であるというマイノリティの立場や過去にUWに留学していた経験を踏まえ，利用者が何を必要としているのか，どのようなサービスが望まれるのかという観点をもち発言をされていた。今後人種に限らず，一層の多様化が米国でも日本でも進むと考えられる。そのような社会において，各個人の持つ経験や特性を尊重し合い，それをいかに活かすかが，多様な文化の共生に繋がるのではないかと感じた。

4　アメリカ図書館協会年次総会と東海岸大学図書館訪問

米国滞在中は，シアトルだけでなく他の都市にも赴き，国際会議への参加や大学図書館への訪問を行った。

(1) アメリカ図書館協会年次総会

研修の一環として参加が義務付けられていたアメリカでの国際カンファレンスは，アメリカ図書館協会（American Library Association）が主催するアメリカ図書館協会年次総会2017（2017年６月22日～27日，シカゴ）を選択し，参加した。米国内の図書館会議として最大規模を誇る本総会は，毎年米国内外からの来場があり，2017年は22,700人以上の来場者と6,500以上の出展者が会場を賑わせた。[10] 会期中のプログラムは1,800，展示場を中心に開催されるイベントも2,500を超える数があり，大学図書館をトピックとしたものの中だけでも，どれに参加するか悩ましかった。現在の業務に関連する目録と，個人的に関心のあった情報リテラシー関係のセッションを中心に出席しつつも，折角の機会であるため，気になったテーマのものはスケジュールが合えば参加するよう努めた。

特に印象深かったのは，会議の最後となる閉会スピーチである。その年のスピーカーは，シカゴ在住で2017年に本を出版したヒラリー・クリントン氏であった。先の大統領選でドナルド･トランプ氏と競っていたことも記憶に新しい彼女は，例年にないビッグネームのゲストスピーカーのようで，会議が始まる前や，会議期間中も端々で話題に上っていた。会期中，Fake Newsや情報リテラシーにまつわるセッションが目についたが，閉会スピーチにおいてクリントン氏が，「You have to be on the front lines of one of the most important fights we have ever faced in the history of our country: The fight to defend truth and reason, evidence and facts」[11] と力強く図書館員たちに投げかけたのは，彼女と，そ

して米国の図書館界の立場を象徴するようであった。出席したセッションはどれも興味深いものばかりだったが，彼女のスピーチを生で聞き，それにこたえる図書館員たちの熱意と勢いを肌で感じられたことは，他では味わえない貴重な体験であった。

(2) 東海岸図書館訪問

アメリカ図書館協会年次総会の会期期間中，および８月に１週間の期間をいただき，米国東海岸を中心とした日本語コレクションを所有する大学図書館を訪問した。訪問にあたっては，事前に田中氏から日本研究や東アジア研究支援に携わる図書館員の方々を紹介していただき，図書館の見学とともに日本研究支援に関するインタビューを実施した。

表１　訪問・見学先一覧

日 程	訪問・見学先 インタビュイー
6/24	シカゴ大学図書館 Japanese Studies Librarian
8/11	メリーランド大学プランゲ文庫 プランゲ文庫室長 兼 East Asian Studies Librarian
8/14	コロンビア大学 C.V.Starr 東アジア図書館 Japanese Studies Librarian
8/15	コロンビア大学 C.V.Starr 東アジア図書館 Japanese Cataloger
8/16	イェール大学図書館 Librarian for Japanese Studies
8/17	ハーバード燕京図書館 Librarian for Public Services and E-Resources 他 Technical Librarian 3 名 ハーバード大学法学図書館 Librarian for Japanese Law
8/18	ハーバード大学ファイン・アーツ図書館 Asian Art Bibliographer

a　日本研究者への支援体制

今回の訪問では，日本研究司書の方を中心に，５大学11名の方に，日本研究を中心とした東アジア研究支援について，話を伺うことができた。インタビューを行う中で見えてきたのは，研究支援領域の拡大と，それに伴う他領域の研究支援司書（サブジェクトライブラリアン）との連携の不可欠さである。

昨今の日本研究を取り巻くトレンドとして複数聞かれたのは，移民や在日についてなどのトランスナショナルな研究や，他国との比較研究，学際的な研究の増加である。これはEALでも聞かれたことであるが，研究自体が多様な今日，特定の研究領域を担当するサブジェクトライブラリアン一人が，複数の分野や言語のサブジェクトを担当する場合もあれば，一つ（一人）の領域で収まらない場合は，他のサブジェクトライブラリアンと連携し，支援にあたることが不可欠であるとのことだった。日本研究については，司書やスタッフの減少の声も聞かれた。例えばシカゴ大学図書館では日本人の図書館員がサブジェクトライブラリアン１名（2017年６月時点）のみで，一部の業務は他の担当者が行うものの，基本的に一人で日本語資料の選定，発注からコレクション構築やレファレンス質問の回答などを行っている。さらに，同大学が位置するイリノイ州全体を含めても，他に日本研究を専門とするサブジェクトライブラリアンがいないため，学内の日本研究者のみならず，近隣大学の日本研究者からの質問にも回答していた。また，他の大学では，日本研究専門ではない，東アジア研究担当のサブジェクトライブラリアンが，日本研究担当を兼ねている場合もあった。日本研究の分野ではないが，一人のサブジェクトライブラリアンが複数の大学図書館に所属し，研究支援を行う例も見られた。

b　日本語コレクション

コレクションの収集方針についても，(1) と同様に学際化の影響がみられた。各大学図書館とも，日本研究の中でも，それぞれに強みとなる分野があり，それに基づく蔵書構築が行われている。しかし，近年では関連研究の領域が広がっており，教員や学生からも，より広い分野の収集を求める声もあるそうだ。例えばコロンビア大学C.V.Starr東アジア図書館では，人文科学および社会科学系分野の収集が強みとなっている。しかし近年はこれらの分野に加え，従来は収集対象でなかった自然科学系分野の日本語資料も，収集を行っている。本来の収集対象でない資料の選定は，その研究分野を収集する学内の他の図書館や，資料の共有を行う他の大学図書館の収集方針との兼ね合いも必要であり，難しい部分もあるとの意見も聞かれた。

5　おわりに

２人目のプログラム参加となったUWでの研修は，受け入れ側であるEALのスタッフの方々も様々な工夫をしてくださり，毎日が変化に富んでいて充実した研修であった。また，EALには韓国からのVisiting Librarianも在籍しており，ともに国際会議に参加したり，シアトルの街に繰り出したりするなど，同じ立場の者同士，公私にわたり刺激し合ったことも思い出深い。UW，そしてシアトルという，多様な人々や文化が共生する環境で過ごした半年間は，何にも代えがたい経験を得られる日々の連続であった。

前年に引き続き温かく迎え入れてくださったEAL館長のZhijia Shen氏，今回の研修全般をコーディネートしてくださった田中あずさ氏，大学や図書館のことだけでなく，現地での生活や文化を様々に教えてくださったEALやUWの教職員や学生の皆様，貴重なお時間を割き見学とインタビューに応じてくださった大学図書館の皆様，事前に研修を担当してくださった三田メディアセンターの方々，人員的に厳しく多忙な時期に背中を押し研修に送り出してくれたメディアセンター本部に，心より感謝申し上げたい。本研修で得たものを今後の業務に活かせるよう，精進したい。

注

1）University of Washington East Asia Library. “2017 Tateuchi Visiting Librarian Program”. http://www.lib.washington.edu/east-asia/2017-tateuchi-visiting-librarian-program/view（accessed 2018-08-17）

2）Tateuchi Foundation. http://www.tateuchi.org/,（accessed 2017-08-28）.

3）現地では「タコマ日本語学校」と称されていたが，本記事ではアーカイブ資料内で記録されていた標記「タコマ國語学校」で統一する

4）Orbis Cascade Alliance. “Japanese Association of Tacoma records, 1904-1942”. Archive West. http://archiveswest.orbiscascade.org/ark:/80444/xv19039（accessed 2018-08-17）

5）University of Washington, Tacoma. “Japanese Language School Memorial”. http://www.tacoma.uw.edu/node/22287（accessed 2018-08-28）

6）Washington State Historical Society. “Research Center”. Washington State Historical Society. http://www.washingtonhistory.org/research/research-center/（accessed 2018-08-17）

7）The Library of Congress. “ALA-LC Romanization Tables”. The Library of Congress. https://www.loc.gov/catdir/cpso/roman.html

8）University of Washington Libraries. “Tacoma Community History Project”. Digital Collections. https://content.lib.washington.edu/tacomacommweb/index.html（accessed 2018-08-17）

9）藤本優子．ワシントン大学図書館研修報告．MediaNet. 2016，no.23，p.59-64.

10）Donna Hunte. “2017 ALA Annual Conference & Exhibition: The Librarians Call to Action”. ALA member news. http://www.ala.org/news/member-news/2017/07/2017-ala-annual-conference-exhibition-librarians-call-action（accessed 2018-08-17）

11）American Library Association. “2017 ALA Annual Conference: Hillary Rodham Clinton on Librarians Making a Difference”. YouTube. https://www.youtube.com/watch?v=qNVHs2AKb2U（accessed 2018-08-28）

参考文献

1）田中あずさ．サブジェクト・ライブラリアン：海の向こうアメリカの学術図書館の仕事．東京，笠間書院，2017，220p.